



金圃集

上





此書の何人か
 子に遺したる
 可成り多し

玉泉主



金葉集に加陽の万子
 吾の暇花の上巻より
 かの家子史の巻より
 中平蕉翁の能借百集
 ある巻の此國の法は一
 写し侍て邸中にて
 せうたふし越の耳井
 かく二子梓行の志
 かの孫の書中を
 久しと世より
 を南無菴のあはれ



たしてこれに集むるは
念くきし拾ひあつをさし
字のあやまらざるを
しす其のふきよふは
果れかしみそし
かくはしむるは
あつたしむるは

又仁内寅春

みちおく南都

北溟識

凡例

- 一 編次ハ大段手序の序を考へ又
手序を以てしむるは其の風調を
考へてしむるを以てす
- 一 異本ハ其を考へて其の
異本と記す
- 一 本字多しハ其の
ゆゑに記す
- 一 卷の月等又ハ其の
ゆゑに記す
- 一 多きを以てしむるは
其のゆゑに記す
- 一 〇以下ハ其の
ゆゑに記す
- 一 後人其事を以てしむる
は其のゆゑに記す
- 一 桃青色蓮翁と記し
其のゆゑに記す
- 一 乃乃乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃
- 一 乃乃乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃

白雲くくくまこ世はあま

一 言仙履事とてまき翁の白なるは

一 附白斗集るわく又いひ傳へ

一 根しもの雅吟言仙ハ奥羽大石田

晋流と云者懐くきく東都ある

春と云は此梓村とて朝の粟は

さう懐かき屋敷の海とて翁の月

冷ハ心ゆくま風調は傳へ

一 吾も此江津の家仙其肝は云傳へ

中々秘蔵あり茶様の書句も

四句目まゝいり一はくはるゑん

一 言さし川巻別居をまゑれとて

又其傳は字一お一も後橋義

里園々句一は撰集の時又里園

言久まゝ翁乃白なりとて

撰集の時再集も一

白なる一はるまゝ翁を何れ

人々古代のまゝとて

言久まゝ翁乃白なりとて

撰集の時再集も一

ミラ物
白なる一はるまゝ翁を何れ

白なる一はるまゝ翁を何れ

白なる一はるまゝ翁を何れ

風色やととるに性し夜の秋
世をくハハするれとえはとてか
おく所くは僕もるやおほる下
好する人任るら増補しと

院本井廿井

目録

目乃春秋

右百韻

旅人之家

志乃しと

右五十韻

松のむ

詩あまんと

花よき世

風破口

時若き

時ハあれ

塵塵

冬糸や

采のきさ

星岸や

根白あし

露月や

炭賣乃

はくえとて

初雪乃

京まてハ

海多

竹の本乃

栗得

はくく

下り

初あき

うら

何とハ

萩の

妹有



風流此
 さしひの
 免つりや
 三つりや
 三つりや
 三つりや
 紫隠を
 衣装し
 かきろふ乃
 うかりり
 市中ハ
 鶴の舞も
 月又も
 外かや
 洗足子
 色く此
 久方や
 本目も

隠き家や
 又月多哉
 あつ山や
 三尋乃
 三つ泊り
 紫隠
 柳小折
 昔や併
 いさ子依
 松若菜
 灰汁桶の
 今日斗
 去くても
 口切子
 子奴う残
 杜若家
 友乃子
 あるも

右新仙

貞享三年丙寅正月

其角

日の妻と云ふる雀の歩み
 柳のうきと云ふる雀の相対
 雪村のうきと云ふる雀の相対
 酒屋の懐に入道の月
 松の山手末代方の香夢
 炭竈と縁と冬の間
 里く此妻不のうきと云ふる
 赤糸駒の雨おけひき
 朝のうきと云ふる雀の相対
 念仏のうきと云ふる雀の相対
 侍のうきと云ふる雀の相対
 敵家を身と云ふる雀の相対
 有响の梨打鳥帽子
 浮世乃象を安の足
 悦見一箱の本権乃
 後信女
 山手
 會を申變乃

文麟
 松風
 コ舟
 芳重
 杉風
 仙化
 李下
 朱絃
 教豆
 千り
 色蕉
 角
 角
 角
 角

法の土赤判装を埋てまむ
とつりの記を三川か竹の戸
さくりし車かそゆらむの陰
はしと小雨ともゆらかまう
跡を強き草山の跡をゆく
静く小碎く蝶をさるる
原をさぬさうつる物あけ
と多ある眉と髪を夜く
墨子吸く情よる白く宿る
霧分乃風けり。矢もかよ入
かひそてふはまるる狐の
あられ月影の星かき
る乃戸極驚き此は位徳々
我之代乃刀折振治
永禄ハ金芝しく松の舟
近江の田植て後よとらん
疾起すゆは情まを本を
舟よる此湯乃浦をるる
筑紫よて人の娘をり連て

下 角 里 法 化 下 白 鶴 角 舟 枳 蕙 里 白 法 化 下 角

跡勒乃堂ふおのひ赤
侍育の障の墮るる草中
あまの蟻乃あまのさの
雨ふ人そいやくさるる
門を急る生破隙乃寺
理不るる物よま末六七
あつて 牧乃市巨撰
鴈の多夕日と月を改め
紀乃能屋秋室をなす
稲妻乃其れ石と花の
つるれまを 里法
人あまの年を物とるま
漁をり 菘の 合山の
山玉の武仙とある画をか
系り 飯まる 野井の
玉川やおのく 赤の
江の 在代 若 若 若 若
舟とつるをさ 蒼さるる

あ 里 化 蕙 角 法 水 枳 白 下 鶴 角 里 白 法 化 下 角

南むく葛屋の細乃若宿て
 不ト
 秋と暮をく川をのつましく
 保保ちぢの彦彦と打合を
 驚くり買り秋のころを
 麻乃着をぬいぬいさつめ
 ぬき男入の斬まを月
 官乃雨使七里をぬき
 伊勢何日のそれ川つ
 水車平つくまあ
 毒ハけうの院く張罗
 千春
 二月の蓬葉くすめれや
 帰徳半乃おきき日の乳
 胃あぬ敵乃縮と織垂
 おもあつと昔れ川さ
 菱の葉と志くまを
 下
 木魚ゆける山陰み毛
 因をやく休むる約の月
 新さあ長く流まあ
 甲一耐露と壳まを付く
 春ト

包なるく守く毒ハ樽のう
 法
 三度少むるの橋を山
 下
 あくハまら草の露まを
 傾城とまをぬきのまを
 下
 津ゆき雪小まけ川
 白
 舟海と毎れまか
 梅まら若く白ひなり
 山
 む雨よる乃灯ま消えぬ
 坂
 抱とる取の仲も志川
 化
 伊勢をまの月ま約白
 下
 輝よりま橋流るあま
 下
 伝書乃治ま世やま
 角
 唐士まもれか
 山
 ある牡丹千里代香とを
 春
 きまむ岩ま湯とま
 飯
 岩根まま地勝とま
 化
 川乃やと井乃あ信保
 0
 香ぬまらまつは区
 里
 復法をけま青ハ信
 上三

足川の岸山は白き山
千尋の深き水の流るる
あいら川流るるなり
をたふさふさの雲は白
鳥籠乃七尋の深き花白
連流くりり流るる久し

角 山 白

十月十一日 残別去 芭蕉

旅人をあまを水に初め
亦さしんを宿くみ
鷺鶴乃白ほと雲の
船を分りし山陰に
うけつらうき芝生の
新しき森の月よま
中乃秋画工一つ
新てしししししし
秋のや吹舟よいく
鈴と紙しししし
酒のよま早乙女
卯月乃雪と梅の
練つら袖つはる
蘿一面ししし
そとあしぬ里は
月やや雪うん
昔の籠るく白ひ
おとしの雪事と

由之 其角 枳風 文鶴 仙化 眞児 観水 全峰 嵐雪 瓶年 之 角 凡 鋪 化 崎

陸中より来る車の轡を巻く
 沖こく舟はたさくハ誰か
 船由より名の付く波を尋ふ
 別ち一層とぬしと暮のつ子
 唯の筆志を一浮世の卯入
 萱けぬあめ乃雪と替く家
 光の身乃縄を少種をさうる
 君信るはハ一流の筆智
 的秀ハ一浮の松とそくはく
 命とあり人 舟は 這ハ蟹
 都めくもあつう人海のさ
 去一ぬ御ちとれや有内
 幕や石さ心坂の日に一はれ
 小畑さひハ一き常山子作ん
 きのそ乃乃るを何傳ふあそん
 きんるやそと味ハ一ゆり
 薫乃志をんと面白くはさみ
 感うさしハ一氏乃そま
 川牧野ハ笛吹かすの音夢

意 之 香 白 化 之 白 角 雪 角 雪 角 白 意 之 化 角 白 意 之 角 白 意 之 角 白 意 之 角 白

俣方ハ一ハ一擲よさ次杖
 尺若ハ一ハ一文字此子昂と唾て
 境乃ハ一ハ一き胃とあハ一
 臣家や言疾虫の友の交りたん
 後ハ一ハ一出ハ一は首さくハ一
 岩体さ目ハ一ハ一香のそ芽のそ
 夢さハ一ハ一あり 夢の山香

角 白 意 之 角 白 意 之 角 白 意 之 角 白 意 之 角 白 意 之 角 白

芭蕉

暮れしと名や小松吹萩落
 翁をたかして 秋の月 月 月
 踊る美徳 秋の夜 月
 よしとあしを 月 月
 ちる音やあし 秋の月 月
 あしとあし 秋の月 月
 波あしとあし 秋の月 月
 雨しとあし 秋の月 月
 多居しとあし 秋の月 月
 と合意しとあし 秋の月 月
 榛乃れしとあし 秋の月 月
 弟とあし 秋の月 月
 夕雨乃れしとあし 秋の月 月
 子とあし 秋の月 月
 侍のあし 秋の月 月
 そらとあし 秋の月 月
 洞とあし 秋の月 月
 忠とあし 秋の月 月

物高を程乃 鹿乃 鹿乃
 草をゆきくは 鹿乃 鹿乃
 帯より 鹿乃 鹿乃
 ゆりむ 鹿乃 鹿乃
 春を鹿乃 鹿乃
 うしとあし 鹿乃 鹿乃
 一枚とあし 鹿乃 鹿乃
 秋のあし 鹿乃 鹿乃
 翁とあし 鹿乃 鹿乃
 忘しとあし 鹿乃 鹿乃
 鹿乃とあし 鹿乃 鹿乃
 翁とあし 鹿乃 鹿乃
 大とあし 鹿乃 鹿乃
 翁とあし 鹿乃 鹿乃
 鹿乃とあし 鹿乃 鹿乃

お流よふゆめをんり
古き多草のたふふふふ
やまふりほらそんあふ
おふらよふふふふふ
たれふふふふふふ
うふふふふふふふ
うふふふふふふふ

ト市コ益叔良故

暁や音致すきぬく藪月
輝を造る椿りけくあ
鹿もむんふさふふあ
かろく牡丹の名を廣ふ
献く又同き事の上なる
扇の角をつくと花
春よ何の藤終入靴を控
さ川音し將監り養
馬の舞あふふふふ梅の
おこふあふと志め鏡の
伊の海よといふおあふ
敵乃首たれくあ古
村人よ雲の遊りくあ
清江門伎さ音りく
遠く出と今月の酒甘泉
月と名あふの雲さあ
あふふふふふふふ
ふふふふふふふふ

園風

梅類
半珍
土芳
良田
風麦
色黄
木白
歌
配力
夏
凡
芳
亦
砂
力
風
麦

そめよ樂れ家響泣腫控へ
あしつらくれ傍ぬの汁
世花く庵をふひまを今名見
肩よ指ぬの休の早蕨
あや富響よまをん里隔
放く衣と紋紙道よ其れ
華礼よ志けりよ言も意を
如寄る竹の戸の内
後朝の舌の子れ佛と醒え
着仲々きくけりちりり
町向る様の中為候ちき
多をひへらる様はの鼻
所宿ぬと寄く島帽子解て
洞とありしや候り 甘葉
七多し暮をわらう深服束
あ膏く世とあしるる月
柿の木の枝とあらしふたを
飛くすきぬし名や 小葉香
修刺志の踏染入る峯傳い
小年の早ね 白心村中
響の尻餅 寄く 鳴響らん
松々一本山入神く
乞食して花ふまがき荒葉
糖子く ぬきこきいさよ
寄る多しけらく 舞のおき
思ひぬ方け山吹と 摘
けしらのたを嬌るし小物伝
あぬのよて琵琶の若葉
川ろく 菖蒲の階子きん
月の廣吹て昔よ夕多
月のお志くし 魚のいさ
燈ろくく 魚のいさし

芳 白 歌 麦 不 芳 小 寂 口 白 証 風 麥 芳 凱

白 証 風 麥 芳 凱

元禄七年九月四日

嵯峨亭奥行

支考

松風の影酒さすもたれ無き

月をかくみくも垣けし

町のつらき藤の冠織え

さくしゆのゆき乃福とわさる

北山もさくもまやう川と

世山うくも霞ゆるさし

藤おむりも藤の底に切り

床くあまもさうくと利

夷藤結乃さあをさく

喧嘩の中をさげよ川のゆ

仕合と矢橋乃あをさる

あやけと藤の何すさく

やうくとほりもさく

大工屋板や乃ゆき

周のむすはくもさく

面乃藤白け帯ゆりや

除きとわさるもさく

親とあまもさく

月影も又うさく

さくもぬきんけ

嘆きも毎さく

陽光もさく

幸と猫乃さく

心依乃さく

乃場の門乃さく

一里代乃さく

山のみさ

日乃さく

母乃さく

藤乃さく

傍軍乃さく

者乃さく

小倉乃さく

先年の乃さく

水乃さく

苗乃さく

淵乃さく

淵と今乃さく

後

色

會

惟

卓

望

考

推

芝

其

其

其

其

考

其

其

考

其

其

其

其

其

其

其

其

其

其

其

其

其

其

其

其

其

其

其

其

其

其

ちあんの葉ふ川とてと香
 法身とてとくくもをきり
 こぼれくせり新のあき子
 物多き葉海斗と尼の業
 何と次方よ牛代般はく
 朽とせし姉とるたる捕の枝
 月見よ川中造作せし
 なるもゆきとすり秋の風
 濱乃小家とるるき万すめ
 懐きぬかきくもとくけ快
 いそふり舞よふく豆音貴
 雪隠の言もく歌くあのか
 相筈はくしひ又雪の啼

芝 雄 考 申 舟 琴 考 市 芝 雄 袋 考 並

家松一戸の松とてのめをきり
 がしる葉門のあきふあき

松のちをきりふふあき序ふ
 汐子れれとてきくゆく蝶
 風中日のちくくまう川ひ
 月所りぬ八鐘又あきり
 礎ハ只何すの叶せみり
 垂とくかき松居一罪書
 比しとや積乃湯ぬき感持り
 ちあふふか乃及たらはく
 一海もくあきの目代表の中
 この歌くよ清の雪そ
 くらくくあきの分都のあき
 なるもく川の中流あき
 運とくく様をと森と一の旁
 月小思心とていふあき
 歌きのあきとてあき
 ち乃あきとてあき
 志のあきとてあき
 蝶舞とてあき

乃登乃極々も御交離れ友
 儿悽よもくもく心さかろく
 如云ぬに位子ぬくく懐き
 糸を宿世に結ぶる時
 憂勇とて付手此情より美き
 位くもくと道とらるは見
 森元居る何處も静かなる月
 記念の神よりつむ箱虫
 百場所此本體を言つて
 捨皮を移すは舟の船に
 物僅ひ紀の貫之は酒鑿り
 顔一くくり朽ぬるなり
 生れたるは世に生るるや世の古
 空乃ち後ハぬかきは言
 春の駒おのり影は振ぬ
 吹雪の袖をふるふは才
 松竹乃眞加と習ふく市の
 房建つる 暁の 雲
 右ハナニカ粉吟の

其角

詩あまんと年と會つ酒價に
 冬ゆ日多くかる馬 麤
 牙張き若し園をゆくはん
 三線人乃思を位一は
 月ハ神より手傳の條の上
 鴨乃羽志をて取ハゆき
 融去下ぬ傳をまの妙者
 一川山崎傘をと舞
 無竹のまを藍不候や
 羽場乃雲より影をと東
 一川水里の在處は類月
 新々やまもつてと喜まう
 ほくふよを 怒の事と叫く
 うき世に河心宴食の瘦
 皆ハ赤衣重し一は八人依
 とも成何く此埽下んを
 青より細帯大くくはもや
 縹々々々 麻ぬ取時ぬ月

角 並 角 並 角 並 角 並 角 並 角 並 角 並 角 並 角 並 角 並 角 並 角

聲ハ乃述つく修まふさめ
あふひやんく昔うさ
嘯く若令 縹几小紫
黒翻く強一おとせり
枯藤髪常噪の角を其折れ
磨社を便とくと氣海の晴
終るれ種さききり 那こ
締 懐よ 妊るあつはふ
山きく四睡の床とふく
うつこ火消く格乃灯
下の布翅をぬき月と
西風をあやふ自ひあやめく
言いふまぼめびり
みりのくけ考あしぬ 石白
武士乃濯の丸痛おくれ
いふふの物乃 雷成若け
何あまんと其を今う
春湖日暮くや 鳥 吟

角 苜 角 苜 角 苜 角 苜 角 苜 角 苜 角 苜 角 苜 角 苜

お寺畧

さちん

あまふき世あ酒白く食思し
畔をきと陽冷て代瘦
寺鳴くま響をほろん
身と沼と河の黄と芦刈
作のさくはまふこ物新
琵琶流の雨の約の時
朝より名はらしとふふ紙衣
浪人のまよふ鏡 寄
吾ぬ乃一ぬよ入ひさるふ
寂さく一室を物といふ
寂ふ退之り行塵と奪
寄書けり川が浦を唱るん
吹くる海に鯉 ニユキ 於
傾城の礎を掃く 祚代
押あつと角をかつす内ふ雄
化一の櫓をわきまの月
破蕉語つて 侍の上と次

一品 苜 苜 苜 苜 苜 苜 苜 苜 苜 苜 苜 苜 苜 苜 苜

花月火山開

藤と秋つく老けくさひ

賣銀鮎一寸

箕面の庵や玉と露のあ

朝日新風の紅とくやう

嵐喰喉早乾

霧籬顔襲共

霧浦浦目潜

山仗山平地

門番門小天

鷓鴣窺水鉢

あわよりのくくく

あわよりのくくく

あわよりのくくく

あわよりのくくく

あわよりのくくく

あわよりのくくく

あわよりのくくく

あわよりのくくく

さ

さ

さ

さ

さ

さ

さ

さ

さ

さ

さ

さ

さ

さ

さ

さ

さ

さ

さ

秋風

桃青

詔、風、

さ

さ

さ

さ

さ

さ

さ

さ

さ

さ

さ

さ

さ

さ

さ

さ

さ

さ

さ

伝流跡やあふらの際の新注で
 磬打くこころを悔ふる 乃 注
 橘乃葉より赤文章と出候へ
 才より一許と 其のさうらふ 口
 お陰いふひをささ小月照く
 果をとりてみる 夜のあさぐさ 萱
 せりりく世後とふとる秋の香
 九舞ゆひはに尾上さきき 乃
 風の香をささ蘇鉄の匂はく
 大口ささる 庭の香 掃 佐
 舞のささく楹の群 立ち来家
 能くさく舞を悔くを注す 七カ
 一袖乃形かんの連身膝より至 乃
 名を恥ぬま歌のこころ 佐
 面くけく鏡より命の男つさ 萱
 赤くく縁のほろを柳子の香 七カ
 裾織色の袖乃とと打く 葱
 柳の水乃をささく 乃 枕

貞享四年十二月廿四日 伊修庵
 あり一葉四叶社より 枕青

麿香を鏡も注し一音の世
 石段庭乃ささ申あふらふ 相
 時くハ松笠あふ風やさく 茶
 赤くをささく山のももろい 茶
 秋香くく月をささ園のひらぬ 茶
 つまよりひひくささひの 茶
 肌をくくをささぬ袖と襦さみ 茶
 こほりか葉の思ふ注刀 茶
 乃りる鏡邊取は志しくと 茶
 やくか 一風乃境むる庭 茶
 古知はひらくささる麦刈く 茶
 おゆの香やや聖るささるん 茶
 松明よめ一音ひり秋の風 茶
 空をささるの香をささる月 茶
 紛中香乃石をささる 茶
 温泉はぬきく人をもすまの 茶
 竹塚の廿ハを乃々なれ 茶
 あり位息を写る注し 茶

朝露よくまけく徳の継子の好
ゆけくちの坂乃意け
あつる一里の河東好ひく
あつる一里の河東好ひく
初更のく夜とけく夜とけ
初更のく夜とけく夜とけ
新編のく徳と徳と徳と
徳と徳と徳と徳と徳と
折ゆのく心と心と心と心と
縣乃舞の志を同なる月
秋山の仗徳と若る若るの
及ひとまをて訓分る道
優悠のく徳と徳と徳と
あつる一里の河東好ひく
西のく乃と徳と徳と徳と
表の被も敢くつなり

茶、茶、茶、茶、茶、茶、茶、茶、茶、茶、茶、茶、茶、茶、茶

濁子

冬系や人をかぬ市の柄
くけくとまへ入お乃を其角
年の黄たろ顔の飾して世
大と焚舟の早くさきや仙化
後うつくねおりのを破の月
挿るくすんすた一むら口
太刀指るまのわけてまけ
車のはなはけむ珍むし
あつる一里の河東好ひく
あつる一里の河東好ひく
あつる一里の河東好ひく
あつる一里の河東好ひく
あつる一里の河東好ひく
あつる一里の河東好ひく
あつる一里の河東好ひく
あつる一里の河東好ひく
あつる一里の河東好ひく
あつる一里の河東好ひく
あつる一里の河東好ひく

茶、茶、茶、茶、茶、茶、茶、茶、茶、茶、茶、茶、茶、茶、茶

ね 産賢者とならん ね又えて
 何の海や 給へ 賢を乞
 松の海や 石の庵より 海との
 ん々 婿寸い くとせれい
 何の財えい ありのき
 多 仙ひけ 彌をい 家れや
 行里の 庄をいむす 角入て
 伴勢 おい 子 鞋 菱 笠
 長 袴 や 拾 子 ね お よ い
 形 多 破る 切 袴 折
 月入て 輪 多 折 不 備す こと
 ち け 労 と 多 入 や さ 来
 塚の下 母を ねん 杖の 風
 邦と 軍 不 こと 多 け く 取
 それの ね こと 多 こと 得 こと
 可 餅 と 多 け 月 白 雪

角 下 子 化 子 角 子 下 化 子 角 下

ち こと ね こと 多 こと 得 こと
 よ ね 家 残 こと 多 こと 名 こと 多 こと
 鰯の 居る 里の 垣 根 餅 と こと 多 こと
 桑の ね こと 多 こと ね こと 多 こと 多 こと
 あり ね こと 多 こと ね こと 多 こと 多 こと
 みる や こと 多 こと ね こと 多 こと 多 こと
 住 居 こと 多 こと ね こと 多 こと 多 こと
 菰 こと 多 こと ね こと 多 こと 多 こと
 被 衣 こと 多 こと ね こと 多 こと 多 こと
 あ ね 髪 刺 こと 多 こと ね こと 多 こと 多 こと
 精 こと 多 こと ね こと 多 こと 多 こと
 ね こと 多 こと ね こと 多 こと 多 こと
 雨 こと 多 こと ね こと 多 こと 多 こと
 ね こと 多 こと ね こと 多 こと 多 こと
 糸 こと 多 こと ね こと 多 こと 多 こと
 こと 多 こと ね こと 多 こと 多 こと
 思 こと 多 こと ね こと 多 こと 多 こと
 遠 こと 多 こと ね こと 多 こと 多 こと

角 下 子 化 子 角 子 下 化 子 角 下

青くやうらぬ石のそ田うて
 研てすゝめふかひ橋乃うく
 夕ぐれハ唄ともすぬ草池下
 け水走るふかすれ思とも
 進ゆる木橋の馬乃かうり
 せよらまき一女郎れろ一
 ねてけきハ鈴をささく入る
 女師走れ月とちさふら
 空の日乃まわらぬ酒の
 栄境登つよれてほろく
 砂系の川乃きららぬ交りて
 けろ一牛とハ鈴の約け

水 泉 笠 水 兮 人 橋 進 水 兮 魚 笠

貞享四年

芭蕉

星界乃男とよとや留る者
 船瀬の流 響 乃 埋火
 薬山乃きり終は梅を極くけ
 花の子猫乃あまを産け
 帯乃度衣を御月の糸の足
 思のあまこ乃聖邊まき風
 一里代を母あつ川上小
 初さめめく門をさむこ家
 市におくさる一をと膝ま
 半あ繞るまきまのつと
 初白乃きみなる一我い
 月と酒一たる蝶貝の酒
 言細甲とまきく秋のを
 後王初きり守作乃橋吉
 蒼色乃西け岩のあまけとく
 家本鳥のあまく松の古枝
 けくまを屋舎射とつとけ
 せりれあまとまきくハ流け

安 信 自 笑 知 豆 業 言 如 風 重 辰 言 信 風 笑 風 信 辰 信 辰 足

糸物も蕭道とあるを
 つまも此の年をさる可
 のまの人の作念の松の鳴り
 志を——富祇の名を
 益原くそ押さぬ北野
 矢ふらつてまきひく
 馬賊ハえひものみれ
 あまのきの迷もあ——
 秋水一斗ありつこ
 日赤のまの切月と
 巾より櫛とをそな
 牛の鈴とくぬすけ
 昔より鶯の鳥とい
 つかいのあまの
 ながいといと
 綾いしく居る
 麻とを衣のうもつ

五 四 三 二 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

花月や鶴のうさ
 花れ物日乃あま
 櫻梅山の峰を
 いさぎよくし
 音と風と果
 秋のまろ
 ぬまろ
 亮く
 難追
 庭く
 友
 麻
 月
 衣
 簾

五 四 三 二 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

昔とてく坐し酒を飲む
乞食の義とてくわきの老
流のくま屋の舞と拾ひ拾
市幸ふを母を代みくま
とてくる年の小角豆は宛あ
萱屋もくまの炭園はく白
女子あまれ小坊あり子お遊て
おれも守の宮をくまの蓮の雲
志阿まの飯をのくまの月のあ
あおくまの存恩をくまの
釣橋くまの存恩をくまの
豆屋つらくく母の喪への
元政の昔代徳と破ぬく
伏見本橋の鐘をくまの川
いりあまの男猫はくまの拾遺
あれあまの雪をくまのま
あまをまの白けをくまのま
山を花白くまのまのま

昔 乞 流 市 と 萱 女 お 志 あ 釣 豆 元 伏 い あ 山

炭賣代おのくまをくまのま

重五

ひくの 鶴尾と 鏡磨寒
荒棘馬背のまの 野水
鶴尾伝すくまの月をくまのま
くまの秋の月をくまの酒をくまのま
藤原のくまのまの 羽
賀茂川や胡堂千代をくまのま
いそくまの舞をくまのまのま
くまのくまの橋をくまのまのま
くまのくまのくまの 鏡磨
くまのくまのくまの 鏡磨
火おのくまのくまのくまの
門のくまのくまのくまの
血力くまのくまのくまの
旁りくまのくまのくまの
不のくまのくまのくまの
くまのくまのくまのくまの
傍りのくまのくまのくまの

荒 鶴 鏡 藤 賀 賀 火 門 血 旁 不 傍

白雲渾^くぬ水雲^を烟^とと^は洗^ひ
宣^旨か^らく^く敷^くと^は務^に
の十^手と^は三^つの^ら多^る産^也も^らて
か^のこ^ちを^むひ^る七^夕の^しま
曲^直は^は種^のを^のつ^ちを^もら^ひ
兼^代あ^らは^らす^ト本^木お^き
曲^の家^は買^ひの^り甘^くも^らる^る
納^福に^雲と^あら^はる^るの^丸
さ^らも^らる^る持^ちか^る正^月は
竹^の更^もの^り并^き乃^は交
寅^乃日^の目^を版^治の^もも^ら
さ^から^くし^き南^来れ^地
つ^らき^して^後と^あら^はる^る像
匠^のあ^らる^る乃^はさ^らの^根
醋^すら^る焼^老か^らく^る
猪^のあ^らる^る種^のあ^らる^る
少^れき^して^して^して^して^し
秘^しに^のり^ると^あら^はる^る
必^ず生^るあ^らる^る必^ず死^す
必^ず死^すあ^らる^る必^ず生^る

お牛男 廿四

何^んか^のこ^のこ^のこ^のこ^のこ^のこ^のこ^のこ^の
こ^のこ^のこ^のこ^のこ^のこ^のこ^のこ^のこ^のこ^のこ^の
齒^牙の^あら^はる^ると^は物^のを^もら^る
ゆ^のは^らと^たら^しあ^らる^ると^あら^はる^る
馬^糞糞^のあ^らる^る乃^はの^のあ^らる^る
常^代湯^者と^あら^はる^る正^午
り^らる^る乃^はの^のあ^らる^る
燈^籠の^あら^はる^る乃^はの^のあ^らる^る
高^秋の^あら^はる^る乃^はの^のあ^らる^る
藁^麦と^あら^はる^る乃^はの^のあ^らる^る
初^月夜^にあ^らる^る乃^はの^のあ^らる^る
取^花買^ひ乃^はの^のあ^らる^る
吉^作の^あら^はる^る乃^はの^のあ^らる^る
身^婦の^あら^はる^る乃^はの^のあ^らる^る
あ^らる^る乃^はの^のあ^らる^る
御^食と^あら^はる^る乃^はの^のあ^らる^る
懸^念の^あら^はる^る乃^はの^のあ^らる^る
不^形堂^入乃^はの^のあ^らる^る
必^ず死^すあ^らる^る必^ず生^る
必^ず生^るあ^らる^る必^ず死^す
必^ず死^すあ^らる^る必^ず生^る

栞名に保まゆの福やあのみ
くふいを記く身婚と申し
篠ありく梢の帯さひ
と縁くく不破の帯人
乃すくくははく打も其を忘
福さくくのさくを七十
奉加めれば堂を倉うらむをひ
い川の傘此下筆まは
蓮池は鴨の子燕の夕鳥
中よまゆつう落根をま
月よまゆつう唐舞の髪結
意やぬまぬ臨海を川
秋蝶の塵の夢まく志月を
夏代實つうあ常を川ちり
秋より祝をひきさくあ小
能くく典侍の扇の門侍
こく花猪鷓尾長の巻の巻
くくくくくくくくくく

言 辰 足 信 風 意 言 足 意 笑 信 重 辰 自 笑 安 信 加 風 知 足 業 言

由 詠 草 の 巻 十 八 寸 芭 蕉

京まぐさくはくくくくく
千巻の巻くくくくく
小略や免とあふく袖ひり
酒ももまじまじくくく
川流一匹馬乃袋と打掛
僕をおくくくく牛の巻
少川とつ反哺の猪鳴は
明日の命此飯多あり前
くくくくくくくくくく
睡つくくあまひくく
そのまぐくくの後てくく
たもくくくくくく
髪多川分然乃油の巻くく
あまの巻くくくく
釣簾の布またまくくく
楊枝すまふれくくく
小袖くくくくく
こくくくくく

言 辰 足 信 風 意 言 足 意 笑 信 重 辰 自 笑 安 信 加 風 知 足 業 言

うさぎとていふはうさぎのうさぎぬ
 父乃のいふこととていふの夢
 松乃のいふこととていふの夢
 翅とていふこととていふの夢
 聲の響きとていふこととていふ
 三夜はつとていふこととていふ
 山吉の車とていふこととていふ
 煙那とていふこととていふ
 滝はつとていふこととていふ
 楓とていふこととていふ
 原やれとていふこととていふ
 老とていふこととていふ
 子とていふこととていふ
 陣乃の返とていふこととていふ
 山とていふこととていふ
 夢とていふこととていふ
 志堅とていふこととていふ
 沖地とていふこととていふ

足 兼 言 信 交 気 足 言 美 風 足 信 辰 言 足 兼

尾張の海とていふこととていふ
 所とていふこととていふ

油とていふこととていふ
 串とていふこととていふ
 二百年とていふこととていふ
 櫻乃とていふこととていふ
 八月とていふこととていふ
 雨とていふこととていふ
 一輪とていふこととていふ
 琴とていふこととていふ
 周とていふこととていふ
 美とていふこととていふ
 花とていふこととていふ
 笠とていふこととていふ
 秋とていふこととていふ
 さとていふこととていふ
 帯とていふこととていふ
 志とていふこととていふ
 美人とていふこととていふ

山 兼 言 信 交 気 足 言 美 風 足 信 辰 言 足 兼

暇夷乃舞衣為多嬌(あそびあそび)を唄(うた)
 生海嵐(なまかぜ)千(せん)は(は)も(も)袖(そで)ぬ(ぬ)る(る)
 本(もと)は(は)音(ね)より(より)西(にし)は(は)清(せい)堂(どう)は(は)浮(う)く(く)
 菽(く)小(こ)く(く)も(も)や(や)の(の)十(じゅう)七(しち)より(より)見(み)ゆ(ゆ)
 けつ(けつ)く(く)と(と)蛇(へび)娘(むすめ)は(は)社(やしろ)に(に)ま(ま)う(う)
 多(おほく)く(く)名(な)さ(さ)る(る)——痛(いた)の(の)呪(呪)咀(じゅ)
 不(ふ)二(に)乃(の)根(ね)と(と)筍(たけのこ)房(ぼう)く(く)ち(ち)小(こ)童(どう)
 痛(いた)く(く)切(き)鶴(つる)乃(の)ひ(ひ)と(と)ろ(ろ)毛(け)——む(む)
 跡(あと)さ(さ)ま(ま)陵(りやう)を(を)あ(あ)の(の)ひ(ひ)為(な)る(る)粉(こな)ひ(ひ)
 夜(よ)く(く)清(せい)く(く)少(せう)性(せい)靴(くつ)の(の)戸(かど)を(を)押(おし)
 月(つき)あ(あ)く(く)何(なに)斗(と)乃(の)冨(ふ)ハ(ハ)あ(あ)り(り)て(て)
 棺(くわん)を(を)煮(ぬ)く(く)消(け)く(く)く(く)乃(の)乃(の)香(か)
 破(やぶ)き(き)く(く)る(る)血(ち)を(を)足(あし)と(と)必(かならず)ぶ(ぶ)く(く)る(る)
 言(こと)繁(ひざし)の(の)騷(さわ)り(り)鳥(どり)傳(でん)を(を)ま(ま)り(り)
 紅(べに)襟(えり)乃(の)度(たく)盛(も)み(み)茶(ち)の(の)鳥(どり)を(を)後(あと)
 り(り)い(い)さ(さ)半(はん)ま(ま)い(い)れ(れ)水(みづ)目(め)の(の)如(ごと)く(く)
 春(はる)雨(あめ)乃(の)羽(は)衣(え)を(を)襟(えり)前(まへ)ひ(ひ)ま(ま)り(り)
 青(あお)草(くさ)ち(ち)り(り)け(け)る(る)花(はな)の(の)撮(と)り(り)

貞享五年春

とまらぬ

何(なに)の(の)木(き)代(しろ)か(か)と(と)い(い)ふ(ふ)は(は)白(しろ)ひ(ひ)う(う)那(な)
 春(はる)乃(の)好(この)日(ひ)を(を)會(あ)ひ(ひ)て(て)含(こ)む(む)う(う)く(く)ひ(ひ)ま(ま) 是(こゝろ)先(せん)
 夷(あそび)原(もと)茶(ち)袋(ふくろ)の(の)袴(ばつ)古(ふる)香(か)梯(はし)く(く) 又(また)去(こ)も
 二(に)葉(は)の(の)す(す)ま(ま)も(も)は(は)茶(ち)袋(ふくろ)今(いま)伝(でん)り(り) 平(へい)菴(あん)
 有(あ)り(り)明(めい)乃(の)扇(あふ)紙(し)を(を)さ(さ)ぬ(ぬ)ふ(ふ)川(が)み(み)つ(つ)て(て)勝(か)延(えん)
 蔭(かげ)さ(さ)ぬ(ぬ)ハ(ハ)ち(ち)や(や)う(う)ふ(ふ)ね(ね)の(の)油(あぶら)火(か)流(なが)り(り) 遠(とほ)里(り)
 釣(つり)橋(はし)乃(の)嵐(あらし)の(の)五(ご)子(こ)乃(の)青(あお)巾(きん)也(や) 光(ひかり)
 門(かど)ほ(ほ)そ(そ)め(め)ち(ち)り(り)回(まわ)り(り)中(なか)代(しろ)也(や) 光(ひかり)
 山(やま)海(うみ)来(きた)り(り)信(の)の(の)稀(まじ)有(あ)り(り)袖(そで)汗(あせ) 菴(あん)
 わ(わ)つ(つ)つ(つ)つ(つ)あ(あ)と(と)貞(まこと)と(と)む(む)ね(ね)つ(つ)き(き) 玄(くろ)
 甘(あま)の(の)古(ふる)き(き)は(は)館(くわん)乃(の)破(やぶ)き(き)て(て)水(みづ) 菴(あん)
 琴(こ)を(を)む(む)ら(ら)つ(つ)き(き)く(く)い(い)酒(さけ)屋(や)一(いち)洞(ほら)庭(にわ) 延(えん)
 以(も)ぬ(ぬ)る(る)ま(ま)酒(さけ)を(を)あ(あ)る(る)は(は)物(もの)と(と)ひ(ひ)の(の)人(ひと)
 陣(きり)乃(の)飯(い)屋(や)乃(の)使(つか)ひ(ひ)の(の)こ(こ)り(り)て(て) 光(ひかり)
 白(しろ)き(き)ま(ま)の(の)伊(い)豆(まめ)と(と)人(ひと)を(を)教(おし)て(て) 光(ひかり)
 と(と)一(いち)巻(まき)く(く)好(この)む(む)る(る)玉(たま)の(の)初(はつ)稻(いね) 菴(あん)
 淺(あそ)く(く)内(うち)と(と)賦(ふ)き(き)飯(い)の(の)名(な)を(を)ま(ま)る(る) 玄(くろ)
 蒼(あお)き(き)ま(ま)と(と)流(なが)れ(れ)く(く)指(さし)く(く)ま(ま)り(り)後(あと) 菴(あん)

神はよやとよきなるをば後連の心
返る事よはかりきぬれば
愁くさと池のあやめをば兼て
水鏡を造る起一あつさ
たまた吸舞のあとの煙りの
あつたつものよあつらるる
あつらるる葉の一子をとめて
釣乃王子は浦のさひさひ
夜更なきを表はあつたの輝
志つらう月よ 照杏吹雪
夜つらう照あつたの月をば
あつらとすさむあつたの夢
親いさう葉よ能く歌つる
中川初風を葉よ代をば
世路を保とすふらめや
ゆきこむ掉よ ぬきさ
よのぬきつ法よをばつ
短冊にこむね 垣乃表

貞享五年七月廿日

お竹茶刺長紅呉行 ちんちん

西条輝よまがしんくもあつたの葉
散乃中よりとつたをば
秋のぬきつたあつたをば
月よきつとつたをば
あつらとすさむあつたの夢
葉よ能く歌つる
中川初風を葉よ代をば
世路を保とすふらめや
ゆきこむ掉よ ぬきさ
よのぬきつ法よをばつ
短冊にこむね 垣乃表
お竹茶刺長紅呉行 ちんちん

七十一

人 延 至 正 意 光 茶 人 延 雲 先 景 日 菴 云 延 人 光

如 寫 井 意 淳 及 人 井 乃 如 意 露 及 人 一 井 為 乃 長 如

のこまはきよひのあひのふり 能く
本百重し一重もすも事あり
及思き下部し事ありかゝる
切籠お折すこそ夕暮
さぬく乃者うさるる月の影
人一代の志とよみ 籠
陰し世と為代眼しひし
知れぬるもこと新もあつた
懐くしひきさし一足く又あ
下戸とみくある雲の影は
お嘆乃毒とあふのたふ
嫁きのぬむせめ代眉かて
志のひきさすことさるる
ぬくさやこをれたの
明あき雲とおもひの腹さ
るあを 呼り本さ
花よよれすこと代蓋よあ
兼さるり ちいなる乃り

及子 及子 及子 及子 及子 及子 及子 及子 及子 及子

千くと枝のむれ社うちる
いと柔と指教のひら 芭蕉
日新山旅子の離とれ之末て 叩
清水とすくく 括收又月 黄口
たりろき世巴又報賣子の上 東麻
花けくや本よ 接子とける 工山
そま紙又却のまが 去付く
そま大津又三井の清き
言と又入後の焼く社と又よ
麻より 野う口又元れそら
杉風の答又酒と飲つく
佛と刻む西苔れ 信
鳥おむの髪さ体女夏よ未て
庭と又破るお鳥の月
杖ハ折く味お答い
白子のたまわく
波よすも 藤の骨又すれ
陰十寸於ねのわつ

芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉

桐葉

正長

笠坊てあつりまふ殿男
 又まの塔乃行く夕これ
 鶯 鶯の尾と松の圃はけりて
 風了り又城なく夕の打死
 草くして木の庭葉を引枝め
 田今空り又物又其めく家
 打くくあぬの香とあつり
 たれて君をほ愛より
 沼の浜り一 鶯 遊うせく
 おけん降り来り時を吉ぬ
 靴 靴の束乃寺れ月清く
 猿子の栗れ何をまひくそ
 蜂啼てまゝ炭材の杖乃を
 系をるぬかまゝの尾れ琴
 ありまふまお焚てゆる井又
 入日れ然乃早物とつ
 ま吉の仲えけつとむのおく
 けく一の袋さく家西行

楯 蕉 系 系 山 五 塔 系 山 菜 五 口 系 山 菜 塔 楯

添川の夜

誠人

層多くとも川なまはかひはま
 酒志いかなぬけらる月芭蕉
 着るる後々霧窟まあつて
 理ををぬまゝも秋の夕暮
 瓢箪の大き立石はくろく
 風もやぬくつゆる市人
 何事とも共ある是名利の地
 醫乃あまこと同方不別れ
 笑うくと師をの言はまあて
 飛りて母語をく吉れ詠り
 世里よ古き玄葉の名を傳く
 足跡をくまぬ雨乃ぬぬ乃
 きぬくや竹を常くあてぬ
 く帯ひききたまふ色の美り
 月と比良入高根を寄せて
 雲雀さくつる川の帆ぬり

人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉

破き戸乃打らけり侍る妻の末
石無きまじりて成妻此挽り
遊るくして後納まつむす鏡
そのあひの居る神子のあひ
合はるくはては聖の白ひる
袖帳よ落るきけ行隔
幸やよよと麗のあやを中よ
垣穂入るくは露ハこおきて
あまよに如く妹の夕あま
何のそハたうるをまつむそ
月月のうもの夜を清くよ
破をそくく融よい移りて
秋の田と刈もぬ草の長に
さゆくくさゆくくく字子字ま
いめくき尾鹿の木葉屋
説きせり子け瘦くくひを
衣の比後衣集ようやや
野あけくくくく膠さくら

人 意 人 意 人 意 人 意 人 意 人 意 人 意 人 意 人 意 人 意

イニ初秋やほのま田よりくく
初秋ハ何や田やみくく
をゆくくくくくくくく月
わし庭夢ほのくくくく夢
やでくく藪け竹まきくく
松のくくくくくくく子
まきくくくくくくくく
夕之のまきくくく雨の所
田くくくくくくくく
水氣をいってくくくくおやま
ねとくくくくくくくく
琴瑟弾てくくくくくく
約藤のくくくくくく
新言ま瓦の鬼乃くく
地縁鬼くくく入おの橋
河川くくくくく角力く
橋まきくくく月を砂
石のくくくくくくく
水おけくくく寺けくく

色道
辰 辰 辰 辰 辰 辰 辰 辰 辰 辰 辰 辰 辰 辰 辰 辰
知 如 安 自 風 風 辰 辰 辰 辰 辰 辰 辰 辰 辰 辰
風 風 辰 辰 辰 辰 辰 辰 辰 辰 辰 辰 辰 辰 辰 辰

瀬田の橋才ハ高きよ
白鷺走く炭と賣る市
芝草も此船若掛ふ布衣
孝入一七日戸帳ひくまで
かゝつて何そつと後とつ
妻又可きむ尺ハ乃曲
湯あそび乃れハ伽藍を焚け
むしはらうしはれ竹垣
志のこもれもききしる園の鉢
魚はむし乃客又よ家月
春の才の婚乃を合とま果
以才よりきき明くれの他
猪の子乃親なつてくはひん
うゝれは縁も菜の戸れ伽
ろふしてかこ下りき岨の石
杉葉まきまきほくくつむ
かんくまむお娘もむきく
去るをけやに踏垂乃舞

宜 足 尖 足 宜 辰 宜 孫 宜 孫 宜 辰 尖 宜 足 宜 尖 宜

たつてりて書又よゆる稚子外
凍石も土よりいろねぬちり
杉風又移つて日向のすくきて
鶴はきりておきくろ
みゆくおあすほく秋の光
哀う山の端又月れはむろ
まぬや馬帽子をぬきれり
眉ほそむし恥るうれぬ
寄もホもつとくはけはかきで
ほ飯のゆめはさるれとより
きてある布子昔なる是の此
個うつて新を杉ほえを
川流の魚え人ハなすり
及又雨も家らひのりれつ
よれたほぬまう後まわす
おれなうや襟つふん月
うかゝつて待まむのまはる
唯もつとくはるうきいす

芭蕉

昌碧 菟相 所兮 陸水 越人 舟泉 茶 桐 雲 水 兮 豆 人 亦 桐

及ちの妻も行くまゝに
 泊りなされハ水のとれた
 中へけり新まを付久し
 布板二本板ハさし
 隙のれ一様とあつて人
 合奏半をわいては
 旅とのんちむされお
 幸へ製利一鴨川此水
 塚のまま昔うねと才
 わそまかひまのま
 月志のハ大端と清
 どのまをえと
 山橋と好
 山ひきか
 去りしけ
 づら
 二教の中
 水

妻 人 今 水 相 泉 五 人 水 相 泉 五 人 水

何よなるよ何や
 編笠一きて
 田螺のふ
 公家
 月
 酒
 双六
 翠
 驚
 虚
 藝
 面
 柳
 川
 全
 累
 相

何 田 公 月 酒 双 翠 驚 虚 藝 面 柳 川 全 累 相

身よりく女子驚かせしより
 枕屏風の画よりあみくつを
 関なきし一笛のひびきのきき
 三ツ段乃舟御川の夜
 菴後やひく杜律を味ひく
 花出たりの舟こきの若者
 いろよ百舌鳥の鳴きとをを
 ろのけせ小僧袖ひやふ
 月ひく折松山とつるし
 雲の夜盜の秘埋心なり
 雨のそよ草押さるる音
 酒と川巻の仇濤の春
 雲のゆく人々を藤のさし
 男もはたし老その心
 月へきたらぬのおれ古
 月のあくく甘寝の養
 雲の山を望みみき
 雲のゆく雲のゆく松

花 桑 菴 後 夜 盗 秘 埋 心 雨 の 雲 藤 老 男 月 甘 寝 養 雲 山 望 雲 松

元禄元年

大徳 弄香 奥の 芭蕉

藤乃輕歌神り 五石の舟
 七光る床 昔れ春發 弄香
 初月の新巻 琴たたくにて 尚白
 石よいと のあやこ 自笑
 松のふと秋風 後みおろ 通雲
 松とやまを 春れ春れ 松白
 うかんの 昔の 目と積る 香
 失散は鏡の のら 恋くら 香
 古橋よ古にら ぬと捨よく 矣
 橋乃のやうと 家巻がし 海一 香
 舟のあやめ 舟のあやめ 舟か 香
 浮世乃舟の 花の備 宣考
 あい吹雪男を 白月二ツ 白
 枝とよくは 夜を此 香山
 稲まう時く 社律の 山
 よこ一ふれ 舟のかは 山
 花をよとく 舟のかは 山
 面う絶る 舟のかは 山

藤 五 石 藤 七 初 石 松 松 松 松 初 橋 失 古 橋 舟 浮 世 枝 稻 山 花 面

上三

麦食子嘗も招く友有る翁
 さりける 翁の種の方
 やし火の炬火より松の枝
 出るときその舟のむら 白
 及心乃とて 船の子を捨てり
 中の神見跡なる 舟を切捨り
 三法ちりり 薪をせり
 うさくを 登りて 月のか
 大勢ありて あそびた 旦乃女
 一桑や二桑なる 小袖賣
 枝子若くは 比叡の山
 ころりと 雲より 御前
 春を 祈りて くるあそび
 碑の伯父の 親人なる
 乃の 妹の子 とうとう
 棧へ 止まり 志のまを 捨て
 たり 夢 降る ときの 初夜

山 考 白 香 香 白 香 香 白 香 香 香 香 香

系伝の余則裏松を
 あり新し
 とも

株あり人を 枝の夜明け
 村雨の 乃 仮屋を 吹とて
 町中 紙 ゆく 川 春 此 月
 秋 葉 画 かく かく かく
 知りて あら 夢 白と 押入
 盗人 こと 廿六 乃 乃
 松乃 根 乃 夜 乃 乃
 名 乃 乃 乃 乃 乃 乃
 あ の 月 乃 乃 乃 乃 乃
 瑞 緒 の 時 乃 乃 乃 乃

松 葉 柳 桃 桃 輪 桃 桃 桃 桃 桃 桃 桃 桃 桃 桃

山イニのり羽ニも身ハあり蟬乃小車
 日傘ハ子ハ子ハ九ニ後ハ少クく方ハの尾
 夜と折レくりる世の中ハ柳
 酒の免スえ谷乃朽木ハも仙シ
 猶人ハ後ハも 烟乃松明
 爲武ハそけり明日ハの尾ハアハ子ハ松
 藪ハの運ハつるハ赤木ハの斤ハをハき
 日中ハ侍ツつハ強クなるハまハく
 一釜ハ乃ハ系ハもハかハらハりハ後ハのハぬ
 乞食ハもハあハらハうハまハ世ハの物ハ後
 洞乃地ハ新ハまハともハあハらハもハ明
 昔ハ代ハ紫ハハハ様ハの源ハや深ハぬハん
 流人ハ紫ハ外ハ秋ハのハものハ者
 舟中ハ又ハ舟日ハと澤ハ木ハ石ハの上
 舟ハとハしハてハあハらハうハ漣ハのハ波
 奥ハのハ子ハ代ハ雲ハとハ名ハをハ載ハり
 奥ハのハ風ハ雅ハとハあハらハうハせハるハく
 舟ハのハ宿ハとハあハらハうハあハらハうハあハらハう
 舟ハ生ハとハあハらハうハあハらハうハあハらハう

柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳
 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳
 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳
 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳

奥列若柳那相樂伊奈

トコトコ

風流のそと也や木くの四柱旁
 いとと波打くあまのひ草
 ぬせまうくを藤乃る也也れ
 羅ニ一ハ絲ハのハ音ハせハうハしハて
 一ハ赤ハくハくハ月ハ益ハ有ハきハ川ハ柳
 月ユヒニ唯ハや移ハ少ハくハ村ハをハ移ハるハる
 眺イニのハ女ハ上ハ臨ハ念ハ仙ハもハ雲ハとハ後ハ
 世とあハのハ一ハやハとハあハらハうハあハらハう
 多ハ時ハハハ蟬ハもハ多ハれハハハあハらハう
 樟乃中ハ校ハふハ意ハとハあハらハう
 白ハ髪ハのハ子ハあハらハう
 雪ハ髪ハのハ子ハあハらハう
 楓ととハあハらハうハあハらハうハあハらハう
 ある夜の變ハ突ハ破ハるハ席ハのハ角
 島乃山ハ切ハのハ位ハあハらハうハ月
 冬く此ハ折ハとハあハらハうハあハらハう
 かなハくハくハあハらハうハあハらハうハあハらハう

良 形 意 良 形 道 良 形 道 良 形 道
 良 形 意 良 形 道 良 形 道 良 形 道
 良 形 意 良 形 道 良 形 道 良 形 道
 良 形 意 良 形 道 良 形 道 良 形 道

山崎村尾小宮 年やむ子らん
 茅塚さうり 法水つめい業
 新門雪車一まちの夜をて
 おのく 武士代冬籠る者
 年とぬもの中人の世あま
 交りし 色一うさくあま
 自物と細き松をさし一今
 何處へ事のみ多しぬ七夕
 何處へ宿の柱乃月を見ん
 赤きあうしむ六条う雙
 切檜枝うさくく 榎枝一
 太心 清くみの影よさく
 さし一や酒ちもさくあま
 殺生石乃下と一石水
 色をささるは枝をさく
 酒乃月よみの破る夜
 六十代後いそ人の正月る
 誓約はるあま小細きぬ

山 茅 新 小 年 茅 法 新 一 夜 武 冬 籠 中 人 世 交 色 自 何 何 赤 切 太 殺 色 酒 六 十 誓

元禄二年卯月廿四日

篠井 孫三 年 寅うり

隠はあやめぬあを新の業
 すけは業乃しとある 雲子 業
 切筋山山の井代名者あけく 芳
 畔侍いさる 石代 柳と一 等
 昔うららる世は月と花の年 須
 昔を乃 秋のいしとさし一 須
 梓弓太の羽乃 露をわさる 素
 願事をとるあまのあまの夢
 松園あまのあまのあまの夢
 酒乃きこ帳をさしをぬ
 奪今を語まけてもさく
 さくく 送るは傾城のあ
 雲さくく 送るは傾城のあ
 月の花はさくく 送るは傾城のあ
 枯くく 送るは傾城のあ
 蓋乃 瑞をすあ一のう 林
 梅さくく 送るは傾城のあ
 うせのる 谷は 飯 飯 折

業 雲 切 石 畔 昔 梓 願 松 酒 奪 さ 月 枯 蓋 梅 う

註六

阿のほろほろと云ふもこの世に
ありゆかりの世に思ふことなき
まの雛をいひてはるるのしづか
かえりて思ふれはるる世に
踏床のまをくちきりし所は
木立りてお市のはるる
川後子三社乃能を載きり
春合をくちきりてはるる
四五日の時時乃るる
ささりて月夜をくちきりて
又舟をくちきりてはるる
麻乃着能くちきりてはるる
舞をくちきりてはるる
文をくちきりてはるる
まの世に思ふことなき
まの世に思ふことなき
まの世に思ふことなき
まの世に思ふことなき

葉 等 亦 を 桑 良 を 秋 船 桑 良 を 秋 船 桑 良 を 秋 船 桑 良 を 秋 船

文草

まの世に思ふことなき
まの世に思ふことなき
まの世に思ふことなき
まの世に思ふことなき
まの世に思ふことなき
まの世に思ふことなき
まの世に思ふことなき
まの世に思ふことなき
まの世に思ふことなき
まの世に思ふことなき
まの世に思ふことなき
まの世に思ふことなき
まの世に思ふことなき
まの世に思ふことなき
まの世に思ふことなき
まの世に思ふことなき
まの世に思ふことなき
まの世に思ふことなき
まの世に思ふことなき
まの世に思ふことなき
まの世に思ふことなき

葉 等 亦 を 桑 良 を 秋 船 桑 良 を 秋 船 桑 良 を 秋 船 桑 良 を 秋 船 桑 良 を 秋 船

々門の武威をうける御和
 活ても成すまのよ辰を
 法は龍と云ふ計の果乃新
 昔より此有る御かまひ
 断端の挨拶はうたを説く
 死を忘れぬ。世又の志事
 月詠の留はうたを説く
 肉表の性又入し牛乳子
 萩垣乃川を筑ふ糸の糸
 暮又おひら林を草まら
 傘をさすやうはうたを説く
 提灯さすく切の程　と
 垢穴の底又了る店のを
 肌守守味よき糸はあま
 比より子れかまはうたを説く
 吹もゆぬ匠えの糸物
 糸咲て新信あうたを説く
 他因まて風巾又うたを説く

子 来 子 来 子 来 子 来 子 来 子 来 子 来 子 来 子 来

大石田の野々草のうた
 ともて

又月詠と集るやうに川
 岸より雲と繫ぐ舟杭　一葉
 此高草のうたは月詠く
 里とむしひは葉乃あま　川
 牛乃子よおひらくも乃あま
 あまあまのうたはうたのうた
 儘と松たたく山とら
 松むしひのうたはうたのうた
 糸樂の古き糸とひらき
 夏とあまのうた　大石田乃紙
 たまものうたはうたのうた
 糸五つ糸双六乃石
 美より糸乃思の信のうた
 娘のうたはうたのうた
 あかひの糸乃月詠のうた
 石とくはうたはうたのうた
 糸の後子と織る糸　花むしひ
 匠繫むる糸　山とあまのうた

糸 来 糸 来 糸 来 糸 来 糸 来 糸 来 糸 来 糸 来

釋名村の浮世のわけは家
 カ持たむ 甲斐乃一乳
 むく垣下も海に罪所
 その出さひも刺ち松の木
 星のあつた白毛もうらを
 菓のくせめののきもむる月
 藤のまきもくさうの遺本殿
 紫のまきもくさうの遺本殿
 ねくさうの陰と空のまきも
 ぬくくさうのまきも日の鐘
 古々乃友や誦とさうさう
 あくさうの傷も 舟の音合
 音ふも色師をの市代名所
 燻掃の目と草電乃家
 かまきくと古き信房の空を
 やと免物のまきも 入相
 平治の目と額に草のま
 山田の程とひらひらさめ

良 意 の 景 意 良 景 水 良 意 の 景 意 良 景 の 良 意

羽子小しき電一と後を聞く
 あり重なりお舞の とき後

老つしや山とお初花子
 婦の車乃考馬の井戸 重行
 傍様のまきもいさう 権を打て 曾良
 田作金乃出世の三日月 彦丸
 赤衣のまきもいさう 梨のま
 孫と畑畑と付一 益
 山の清きまきもいさう 帆を舟
 蟹のぬ里と心とまきもい
 粟輝と目毎の母と塔飽く
 ちれ力をむる石の産
 赤裡と母の紅な柱おれ
 雀うまと小田乃刈初
 此形もつと板橋のまきも
 赦をきくもまきも指する月
 衣くとも夜もいさうの陸
 宿のまきもいさうのまきも
 舞入のまきもいさうのまきも
 丸の廊と細な焼る

丸 切 長 丸 意 切 丸 良 切 意 丸 意 丸 意 丸 意 丸 意 丸 意 丸 意 丸 意

物心と本魂よひく去の風
 すくこい滝より清る山姥
 刻力う踏つ下はきさる無傷い
 棺とあさむる塚のあはき
 ちの雲はふくまき岩と懸らん
 えい雲の衣縫くくえ位
 明日志危翁丁を侍生を
 月さくとき陣中乃市
 内業と美著うねくは陣一限
 小袖をう句を返る瓶の原
 水魚の母は似るもゆらぎ
 物よハあはぬあはくぬも
 幸あは乃系林傳く方古今集
 あらう射切の坊乃酒々
 常代草と立そしる羽つこ
 管 種うとまて帯もよれ
 称本を傳うて古き世を凡乙
 こくがね色とこの心まを

王 甚 良 玉 置 良 玉 甚 玉 甚 玉 甚 玉 甚 玉 甚 玉 甚 玉

羽黒山本坊よおわく昔月 甚 玉 甚
 有種や高と蒼くは風の音
 伝きん人乃あきよ夏草 赤 丸
 川舟の御は堂と川まよく 赤 丸
 霧の夜あ迄よ足中三日月 赤 丸
 流氷よと浮つる秋の月 珠 妙
 心も南とさぬとおくる 梨 水
 心ぬむくて是もみもは堂懸く
 百里乃藤と本堂の半道 甚 玉
 山つくと知よ檣の記とけいあ 赤 丸
 芥粉をくむ結本代杖 甚 玉
 衣まの結とひはけ有るそ
 夏うさめ方あし何とあく鬼
 古古本をちよななくる松皮膏
 糸よ立枝よまひく け糖 甚 玉
 月尺とく知きんてさうさ 甚 玉
 髪あひあまるとははるのあ
 まつらふ大のぢとまを折て
 的場乃あまし 吹ら山吹

秀 丸 甚 玉 甚 玉 甚 玉 甚 玉 甚 玉 甚 玉 甚 玉 甚 玉 甚 玉

春と輝—七つのとて力不
ぬくくひそく碓井の水
三川のこ—かこもも松荒田
敵のつ—二お痛よまう
うき消ちまハ望中の地を
ま悪まらり山太の夢
房きハ橋の松紫乃く
雨のま—きる朝日漸
龍乃とをと朽布よ若と知
ましくけまほらお終め法
月山のあ—月風を貴よまむ
船治う火跡を痛つ月の系
取らる相よ見付—云左
写らるおとらく片敷の家
盗人よは色その妹を待て
心のま—つきぬ開くの林
玉掛けさくまは儀をまの波會
幕打あくる乙高れあ
珠おまはは帰る因入江お飯ま

出羽の所序

四流

出尋乃あ福を—破故帳
何—まをくくく風のま物
系仍う船よ房とわ係そ
吾方立か—ま丘のまとま
そららる月よ二子里南
一市—まこ約む久きん
まけらる父うろまとう傳
まあらるま—刺を定む
梅くま—ま—ま—ま
簾を揚く—まを流ま
こおさるまよまのま
信乃ま—ま—ま
雪ま—ま松まおのま
蕨踏ま—ま—ま
川—ま—ま
底洗んとま—ま
まのま—ま
物ま清る—ま

良 再 塔 松 道 柳 風 本 端 如 柳 良 依 夏 執 車 柳 風 良 色 魚 孤 雲 良 良 水 良 入 香 丸 外 氣 丸 良 八 丸 夏

止

昔軍やあつて強故の因縁
根乃小偶よ出に芽焼
手乃くまよとぬの傍抄拂ひ
勇しくくつとのちく後西
つよ小御茶物賣乃古風なり
能為くくるり 却くの氣富
鴨中乃月暮よ赤くも樹おと
あそまよ作取三日月の服
初段公事の枕よ彼灯く
小懐とらうく伊勢の袖也
抱瘡乃素名自取もやうと
西くま墨し枕 杞つまを
細きふ仙廿世安たとやふ
何う袖をと去けりあけ白浪
仲徳ら定活の細代と折依
ちよ使ととあ川取口上
陸撞く抱乙雲の霞く
砕ねくと活生もるゆく

於 是 枝 夏 枝 夏 枝 夏 枝 夏

元禄二年九月

路通

元禄二年九月
二泊あ書里
む一乃使書をく後綴の下
後子もむくやうく月す
あくくまふむ毎のこまき
桂本屋かふく本は形をかすし
合のまやめさるハ見え次
肌ぬあき入ふ見えくマ乃
兎くくのととと紀のおうさ
葉もの烟は後一破草簾
あふくまよく 秋葉呼入
葉よ正く先のきく叫ま
月見おれく様乃聚未
くくくの因ひくあ布袋
地獄繪をかけり此き
ふぬくの尻目よ鐘を恨ん
猫乃垣根よやむぬ新
夏寄あいく考き入ぬ里のむ
香代葉よりと位あを庵

葉 夕 白 之 残 夜 色 意 草 良 因 本 因 夜 之 益 因 夏 之 意

きさくあやあけ甲おもたそ
 岸よりいづら青此明星
 空より舟は糸縷くおれく
 此ころ室小舟と常々まきる
 又出くぬの世後の鏡磨
 孫く様一あひひうらぬる
 たうときハ懸望東の曲しと
 葉のつらう人よほとこれ
 回と買うて倦くくたを業門
 必呪うて風敷乃入口
 夕月夜夜を後よほきさうて
 そらうく空き秋の岸焼
 谷鐵又新伝と春とよさうし
 ちやたさし此種を様上
 折腰く忍びと後う物解あ
 妻と叩けく一やしのあ
 高き店く道より居る古伝
 こころいづらしけうさの陰
 執事 夕 暁 之 逸 夕 夜 良 夕 暁 西 夜 之 甚 通 夜 良 夕

三月廿日即興 芭蕉

志望く七日を乃る襟う糸
 帷く棟のわら細櫓 法風
 足踏木をまきいおれ糸白
 糸一糸をほろる糸の戸 糸良
 名月小隣とねらうそさう今 口舟
 杖見今く一正相の紫を刈 甚角
 黒雲深をふくハ憐の叩く扇て
 月印乃下向輝くしう刺糸
 すくま立付身は使ひあめい
 一夜のちききう鶴角今する
 松明に白くんと心あふハこそ
 生く孫子のあふ伝あけ
 新取志望ぬ歌を世まなけき
 一と一此傳をあひの山寺
 吾を孫傳や橋まあふんえく
 如乃け免れ月代白あやう
 志川とてハ温身成解を月けし
 三川をく席のいつちを屋小
 秋 暁 南 亦 無 良 風 角 暁 良 白 凡 甚 角 口 舟 糸 良 糸 白 法 風

常々軍よりある物す華光
男をく此必粉をぬ糸
膝乗りぬ乃風雅を忘る
涙ありく牡丹ちるはく
母くく〜姉の出る杜宇
あまきる果屋に葉をとり
札焼くかそく〜八倍く
あ〜川を渡ると所の所華
橋をもち程を流る〜流る
京乃月夜にそ〜お〜ら
物と〜くもの痛人の結華
眉ぬく袖に葉をとりふさ
か〜の〜の〜の〜の〜の
いと〜〜〜〜の山乃
言さハ岩屋に換〜破網
何や〜を〜と塩やぬ浦
相成乃柱ぬひ〜をと松
車をとりて〜のや〜

凡 白 意 良 凡 角 吾 角 良 無 凡 母 道 凡

後化

常々朝日さ霞なり折梅子
礼志〜を〜〜の輝さ云来
岩文入のまけ似空〜く〜
や〜時乃〜〜〜
火燧切空を〜〜
廣い所〜と丸〜り〜
縁〜と〜を〜〜
替乃〜と〜 六月の未
常〜網と〜い〜
あ〜〜城の裏町
云分のち〜〜と〜
あ〜〜と〜
年中を松乃内〜料理
伊勢乃状日の帯〜
上組の本筋合の傘さ〜
湯登れ手透ハツト〜
名月の程極子か〜
一〜と〜

凡 化 未 化 未 化 未 化 未 化

正徳

おとそ乃伝原よかる秋の凡
不是な毒と云理は抄する
右の手付指ひの字は清なり
長脚くきり相役の文
山面とりめひくある紙の紙
ま田く存せし中やその凡
平めりるをとあきりりり
後仕をさそくするまう食後
自家さ原の権柄を早そなる
聖具柳ハハハハハハハハハ
君のちをと踊あつとありけり
まわくううか止まの傍軍
集まるとそ遊よゆりりり
おの月と朝日と向ふよこ雲
蒼くく木より木の葉こほれ
四五く五る傳世宗なり
新色町の子女の勢古能
いつ所もまよふまよふ世の中

未、是、化、未、五、化、未、化、未、五、化、未、是

紫原をこけかき凡乃思ふか
望松より蜂の啼きる亭
歩高松手振のくを叫く
如くとみ伏乃万々々々々
半時ほど夜のうらな月の入
火けなまうくと城の御を
新中を苦這うか秀法か
足中とよ足とあつむる
切まぐ富見後を丹波山
うらうらくおと冬たうら
寄合を繚乃乃ぬ妙法半
いふまきやりの蛇のさや
ちくさく風を巻捲くた中
ころりらくと森く葉の葉
砂川乃流く流るく夕月夜
家志とれとと程あつとく
百きとの乃木陰乃唐唐物
葉程おほら西と石橋と

未、是、化、未、五、化、未、化、未、五、化、未、是

指

せらふ標敷よめしきさの夫
 頼場乃公のむつらへ
 初のころ島よはるを遊まやう
 傳つきのあまのけし登を
 とこ板のさきく一乃は格分
 格上ひのく妻もつめ家
 系小紋よはの十徳乃まふら
 手紙さ川くと秋は奉まき
 夕夕ア月と望まね山まより
 始う島乃弓子かき伝く
 雨ふつく穽の戻りのくしと
 軍よあまのさる市け小倉掛
 世比の化もの咄一辭かきて
 聲と鼻乃あむす換抄
 神扇の里トーく洞を
 塗く箱より物の出り入
 花の香け習く止めまう
 日く神一日もれ時家

州 彦

落椿舎乱吟
 いろは歌

柳小折斤高はま一初美尻
 月川捨くる石中乃釋
 村よめ里より圍よあうまき
 塚うけ後と手あふ石垣
 月あふ河あふむ糸の端
 小鞠うけく砂より照り付
 上ときくそとを強巻ま
 手桶を入ぬお面の秘
 塵あも食いつものころあて
 大工乃乃卯アハ振をま
 舟桶乃あ吸うを庫裡の先
 俵をまらうと那德利をや
 成かよもきき而乃あつくと
 愈くやあまあつと洗足
 舟籠を焚之縁と友方ア
 星くまありま棋の本代あ
 月花よあやま山を青月入
 葉わらまを兜のまら腰板

州 彦

諸事より傳立るゝぬ去の身
 流るゝまね 吾水乃れ
 下は生蘇若なるは運の内
 二回さし 望のまき文吾風
 五葉も言しきり不破の罪
 極あつらふ 田代中の小田
 子祝禮くや度よつゝ翁
 我おおひひうき世一人
 世恋といえとまほを吃して
 折きくく家中の戸代以兼
 秋小目とさけ禮の夕月夜
 流るゝあうゝさ岩の糸水
 公と勢ん岩の洞も是兼
 ふとまきり 秋は秋後
 喜ある父乃公髪とさき柳く
 およのきくく 柳乃を月物
 入るゝく傳立るゝ 秋の真
 何う何屋もまねゝゝま

川 意 川 通 意 良 互 良 川 意 互 川 良 互 意 良 川

常や候よ養子る 極乃き死
 月より生あすゝを此あうゝゝ 文考
 やふふ 公敵入と名をふく
 ちくけくねゝゝ 華梅し
 村馬月あゝゝ 啼くゝ病方
 風く吹くねゝゝ 世れ兼ふの香
 身の舎まゝゝ 時風雲ま
 是も同此あゝゝ 飛るゝさむし
 くらゝゝゝ ときすゝゝ 酒とひあゝゝ
 危うゝゝゝ 話新兼 松
 二三子 下川のハ美れまゝゝゝ
 髪とゝゝゝ 見蓮る歌
 中あゝゝゝ 焼つけゝゝ 香の月
 様織さゝゝゝ 角力ゝゝ 帯
 何あゝゝ 回中ゝゝゝ 扇の唱連
 あゝゝ 的乃星のまゝゝゝ 一ツあゝゝ
 何休ゝゝ 岩もあゝゝゝ くら
 白い流ゝゝゝ 水のまゝゝゝ

文考、意、考、意、考、意、考、意、考、意、考、意、考、意、考、意、考、意、考、意、考、意

花よひく御をなすのわが
 心ゆるし遠くあられむ
 城のありしときをみよ
 恋くはとなく寝つきの業
 川改まらば子ぶつら月夜
 終くこもを床寝るさう
 山風よりきくけしるる山
 馬ふせとるるさうけの十屋
 交ったぬとあをやすん物思ひ
 あくすゆふふをみるさうけつ
 狼乃変くてあるまは月嵐竹
 三川のいそやま佛つうて
 麦なすに所材のおゆの沸ゆ
 流橋煙くさう雨のうらその
 何ゆふ人の徒者とあをさげて
 揺りしるさうけと網のさめ嫌
 一門のさるゑのさめく
 けくしるさうけ乃もさるゑ

山 良 山 茶 山 茶 鏡 良 山 茶 山 良 茶 行

元禄二年正月御
 伊賀良品なり
 ナニ
 ナニ

けさ子休さくさあまえお書
 打ちよささふ桜あゆ仙良品
 相帯れ月止心後よ軸さく橋風
 居角カチむ月の上むら文藝
 席のさるゑ乃信長代さるゑ士芳
 けくさくさるゑ半のさるゑ半残
 翳けのさるゑさるゑお折く
 物くさくさるゑえのさるゑ
 常なるるる半十信のさるゑ士書
 けくさくさるゑさるゑのさるゑ
 五身然くさるゑさるゑさるゑ
 てもさるゑさるゑさるゑ
 馬けさるゑ傍軍をのさるゑさ
 月入るるさるゑ士乃さるゑさ
 秋月の簾あゆみさるゑさ
 蕭よけくさるゑさるゑの山から
 魚けくさるゑさるゑさるゑのさ
 羽織ゆけくさるゑのさるゑさ

茶 芳 庭 山 風 茶 芳 玖 風 庭 茶 品 半 残 士 芳 文 藝 橋 風 仙 良 品 書 士 茶 風 山 良 山 茶 山 良 茶 行

耕多て耕ふとあるの先
それ元より頼朝の露
さ川高き先下の句を出し
よのよとあり一奥か此家
昔生一平ら幸か安か此れ
枯んつこころの露のさ
席のすく別まのあまの
用雅仕上り一酒君の青子
世の中い操嬢あまの
徳ささるるを佛切く
瑠璃燈の月とくやう
俵の製刺の金けり
ゆく香をさめくちと路
危の初子か
危長のおくまき花と
なまの雪よりる

風 海 不 燕 此 不 芳 風 不 芳 不 風 不 芳 不 風 不 芳 不 風

元禄四年九月三日

路通

くらりし紅箱乃極並の物見
房もたなる心所海池乃水
白壁の内より石ありそめく
燐燭乃公と昔の夕月
ねまゝ根香の露紫くら
まゝの乳と志はるる
扉もよとやある
あゝ白つきと秋と
金堀り今洞乃と
田乃中よひつる
芝居のれ乃果あつ
山嶽より
おん
月影三階の
芳々此白ひ
のあつや
東風吹

昌房 色義 正秀 野任 乙刈 昼好 玲項 盤子 里東 探志 遊力 香 好 東 子

此の書に轉るる一物なり
 豆腐上よりあけり客待
 う〜〜〜交程と記し個心
 くれと記し〜空の形見
 層層多きとありお寺の記
 は乃き〜ある月此廻廊
 多の香岩を此坊を打眼さ
 みりおのっ香を鳴〜此虫
 うと念とや〜はは藤中
 白髪さ〜おと藤の口のめ
 杜宇弄藤の指と記さ〜
 虫の男〜のひら竹の子は香
 文〜川三丈文選〜川中
 生福押やらと記さ〜藤
 お〜さる藤と記さ〜
 羊履さ〜心居風呂の漏
 内裏建は六在記と記さ
 燕乃か入りさや〜お寺

青 頌 功 互 意 子 頌 好 徑 力 子 頌 徑 頌

梅の葉芽うと此高のさうけ
 かしあ〜〜〜乃 嘯
 雲雀あ〜山田土持は乃や
 志〜〜〜乃 素男
 行隅は虫歯か〜乃 月
 二階の客さ〜乃 辰
 窓やう〜〜乃 辰
 頼の美お地の刀形さ〜乃
 あり〜〜乃 辰
 心居記〜〜乃 辰
 卯の刻乃甚〜乃 辰
 木〜〜乃 辰
 露のれす〜乃 辰
 雀〜〜乃 辰
 懐〜〜乃 辰
 月〜〜乃 辰
 鏡の梅〜乃 辰
 屏のさ〜乃 辰

乙 列 珠 頌 素 男 別 辰 辰 男 辰 別 意 辰 別 辰 智 月 辰 兆 別 去 来 兆

香付草はあてく百種机 正秀
 店屋物々休のふかり 未
 行ぬくひ端の志すの細の糸 半致
 のうきせりふ 雛代下 士芳
 大襟よおひひの目まをさる 琢
 身ハぬき成の乃石所なき 芳
 口の蛤又やう 細工をこ 強
 柳よ片しりとも 大さりの衣 園風
 こく女とハれも後と源の浦 様雛
 むの赤金足る かくま寄 砂
 け夏もれめとくも破あま 凡
 留油祿さやと志す 月を 籠
 嘆きの隣ハあき 縁つて 芳
 海くろくちととくめんち教 凡
 取なき 画を写しる 舎は 龍景
 うすきく 扇竹の刻下 史邦
 花子又こく けつま定下 野水
 雛の徳を 傳る せりう歩 羽紅

元禄三年

九兆

市中ハ物のあはれや 長此月 九兆
 あつしとく 乃多 邑直
 二葉柳たも果さを 種まゆく 去来
 唐折り けくく 乃多 一牧 去来
 山崎ハ部も 石志 石石 自由ま 去来
 けく さいや けく 乃多 去来
 単村は 嘘とつる 夕戸 くれ 去来
 藤乃 青とく 乃多 乃多 去来
 そと 公の ねらう 乃多 乃多 去来
 徳也 代七尾 乃多 乃多 去来
 菓の 膏さる 乃多 乃多 去来
 侍人 乃多 乃多 乃多 去来
 立く 乃多 乃多 乃多 去来
 湯屋 乃多 乃多 乃多 去来
 苗香の 実と 乃多 乃多 去来
 傍や 乃多 乃多 乃多 去来
 猪川の 糞と 乃多 乃多 去来
 年々 乃多 乃多 乃多 去来

五

五六平生よつつけあり 緒
足袋ききよこに黒漆この正
追ふく 甲子のちるれ刀切
く川らり荷ありあに阿く
戸屋まはしちの賣春発
てくはきききききききき
ころくく 草鞋とけり月窓
巻とよひは起しと川粒
そのまじくころいありて
ゆうきき 書のある本 櫃
草菴ま暫く居てハヤやう
命晴しき 撰集乃す
さゆくよ品くくく志とく
信せ乃果ハ皆小町あり
何ゆくう濁すもあはばを
ゆふをよとくハ公彦みね
はれはく又風信するあのとけ
かゆきくこのあをた秘むき

兆 末 菴 兆 末 菴 兆 末 菴 兆 末 菴 兆 末 菴 兆 末 菴 兆 末 菴 兆 末 菴 兆 末 菴 兆 末 菴

所汁桶の常やうたうく 元
あゆふくくくくくく 秋
彩き 鼓き たる月影よ
如くく 嬉し 十乃き
子代徳を物と極く子回
常れきよあひく 香障
今出く 徳は傳り 友の物
唐 耶ろき根よまのく
ゆめくまききききき
こめく口まをくくく 元
このゆひくくく 休む累
運きききききき
金銭しきまきききき
あ川 風はききの着くの
町内乃緒とありありき
何とんかあか 鼓き
ふと衣身ハ 西念の衣き
本元の別草ま春もく

兆 末 菴 兆 末 菴 兆 末 菴 兆 末 菴 兆 末 菴 兆 末 菴 兆 末 菴 兆 末 菴 兆 末 菴 兆 末 菴 兆 末 菴 兆 末 菴 兆 末 菴

久しやう山の中宿りて
 帯は家の標とくく
 冬虎のあまふれさるわらわ
 藤の地をにき明しおく
 何あとしひる 物乃りたかく
 夕月夜草の萱社の内宿り
 今もつとねーあそこの水
 うらふまは自慢をそそけあふ
 又も本事代都をたかす
 境より田のまをまて
 かせ乃りやうらハ能き社を
 あいの鹿をそく名年あす
 雨乃りやう 代せ老 迅速
 空府あつま路のあけたや
 志まら くあふ 藪のそ
 系横 後アといふ 暖乃り
 春と二月 暖乃り

未 兆 邦 未 兆 邦 未 兆 邦 未 兆 邦 未 兆 邦 未 兆 邦 未 兆 邦

木の羽と刷ねて川
 一ぬま凡の本の葉あつた
 股川の船のあつ川とえて
 たぬきをそとす 糸張の弓
 まいっとな等遠くる宵の月
 人よもくれと 夕あお乃梨
 かきくるま 聖除おら 秋
 えきくろらよきあり やす
 何事も世玄の内ハ志
 里んえ初く 午れ 貝ふく
 ぼつとる 去年れ 祢と
 笑夢のあしのとくく
 吸抽ハ先か来され さい
 之里あまりの乃くえける
 いまも 盧同 勇 兵 あり
 けー 一本つき 月 月 夜
 苔あつた花は並ふる 水 袴
 ひより 今 乃 服

未 兆 邦 未 兆 邦 未 兆 邦 未 兆 邦 未 兆 邦 未 兆 邦 未 兆 邦 未 兆 邦

三

いちと紀子二日の物も喰て至
雪けよささむさゆ乃小川舟
火よりいさぎはせる家北寺
ほとと交に皆唱仕音より
瘦骨のすこ起出るちり形ふ
隅をのぞく車川こむ
うき人を根穀垣よりとん
いまや別乃乃口は——か
せらけは掃え流をきちりし
思ひ切るる死るいんよ
青天より有明月の照りけ
湖水の秋乃比良の初春
床の戸や若妻姿すいせと續
布子さる習ふ風の夕る色
押合て病くハ又立川をまへ
あくられ雲乃すこ赤き空
一掃鞆川をまへとれとれ
枇杷乃古葉よ木芽もえら

邦 兆 未 葱 兆 邦 葱 来 邦 兆 未 葱 兆 邦 葱 未 邦 兆

今日斗今午年未初これ
望ハ仕付ちる麦乃あつと
油裏と買ん小櫃の吐吐と
汁乃賣るる秋の風をな
宿の月奥へ入ると古たみ
先工先より故屋の柏楳
文けの侍案中小物まきく
鏡焦し——あり出まを消え
縁にむ毎の義おらまの海軍
帰礎との不ろ赤島の入口
すかた澄ハぬくもあすこ
私遊のけく物乃喰飽
青写いおし海々那のまに
ゆより 薪の風掃りまを立
八月ハ藤あがりらふ幅移
號や戸城のそれ赤とけ
新新と島をそのか陰を
ほしと 古葉よ木芽の卯ら

許六 酒 葱 水 葱 葱 六 葱 葱 六 葱 葱 六 葱 葱 六 葱 葱 六 葱 葱 六

吾はく恒者の高きなりや
 雷戸の雲と酒の酔ひしり
 寸山をりて鶴一本の雲あり
 松急ありて雲を衣乃上
 灯の影めつしき申せり
 山ほゆるふ山をある影
 児を八結の白焼ゆきぬ
 尻目よりもの紫簾の甘房
 いの極る雲も雲川言為雲
 路懸をわくく出る雲物
 有の八段ゆき雲の小方丈
 古乃歩りしぬ流 漸き
 一とくしとく雲のうき雲
 篠をくくく雲の影の板
 宗長のうき雲と雲此法
 雲白ありし百性の家
 花の雲よりくく雲の雲
 七十乃雲の雲雲雲

六 雲 白 雲 六 雲 六 雲 六 雲 六 雲 六 雲

月見雲の雲雲雲雲
 庭乃梯の雲雲雲雲
 公補めり雲は雲の雲
 別雲とりの雲雲雲
 尾流の目雲雲雲雲
 雲雲雲雲雲川の雲上
 雲雲雲雲雲雲雲雲
 西の雲雲雲雲雲雲雲
 一とくしとく雲雲雲雲
 這う雲雲雲雲雲雲雲
 心そりしとく雲雲雲雲
 ぬやと雲雲雲雲雲雲雲
 月代おあえ雲雲雲雲
 桔梗の雲雲雲雲雲雲雲
 位ちの雲雲雲雲雲雲雲
 大丘乃雲雲雲雲雲雲雲
 一口代雲雲雲雲雲雲雲
 ハツ下雲雲雲雲雲雲雲

白 雲 白 雲 白 雲 白 雲 白 雲 白 雲 白 雲 白 雲

丁海のふ根をきれ度うて
舟あらちりすむ襟着
商人の腰よさうし縁袴
ものよき高舞のふりゆい
蒜乃香のよきとけりぬきはく
暑きよのよき家のや月の好や
畑のきつてくさるま家高
言交ぬきりくさるま家高
荻原仁よき家代高の好や
随ふくあさ小乃三日月
その辰の好は好くま一里す
さくさくきつるは好くまは好
西川のよき乃好のよき高
小畑ちりくさるま家高
高のよき乃好のよき高
あけけく高をいふ好のよ
おろくま好のよきくは棟

白、白、白、白、白、白、白、白、白、白、白

洛川夜遊

青くてもあまのよきと夜がし
控くあまのよき秋は秋
雲の月概乃と月を好くま
坊白くまのよき乃好
松山乃高は好くまのよき
塔が代高をくさるま
秋の日の好くまのよき
あまのよき乃好を好くま
雲高きりくさるまのよき
寺殿正山雀籠の中
正高のよき乃好のよき
月の好は好くまのよき
あまのよき乃好のよき
踏あまのよき乃好のよき
好高乃好のよき乃好のよき
らけりくまのよき乃好のよき
高のよき乃好のよき

白、白、白、白、白、白、白、白、白、白、白

町中乃高居八赤くきんとして
吹とまきしは世かしくしきり
草足袋の地を踏まき秋の露
徒見あつた乃古子屋の月
まの乃早苗と字にあらうや
おれもくも砥較おれれ
ゆ候と切くかけう開のあ
證とて移えなまぬ世れ中
付合と皆上言りて若あり
し居とくと委階なり
系物り和當ハ社なあらう
あてにせきくあるはれた目
映揚くあ田とまらうの聲
庭斤高子縁さけり
石断り川池裡謝の家は縁市
ごとうえこむ出ありのへつわ
系あ味くかたれうり花足ん
籠子乃ほろくまらあ妙
菜 菜 菜 菜 菜 菜 菜 菜 菜 菜 菜 菜

酒堂

川かやあ回乃くこの秋の雲
きうら回しり故うゆり居茂竹
衣川麓ハる代寄て色真
糞妙事あその香あ水観
古戰場月も静は流りて 出菜
志ら一足送るああの道 菜
さーゆのつ乃柱又打家く 牛
あんとあく乃を登り入紅 葱
あ、草事肩俣もあをうり 親
あ仙乃る房別の傳子 菜
儀つきの登まらう智書の上 昌房
揚よかきすれ部乃桶俵 正秀
小伝ち内依うと死初ありし 卧言
鬚と唱すと月坊乃香 掃志
懐よとあま像の漱きき遊力
と川く戴くこ方の鬘斗 野徑
花の陰射あは摘付らん 去来
澄くしと符のあらるあま

暖く梅の糺乃耳くさく野暮
 池乃小隅の芥此水音
 雉乃の蛤葉原の釣の月史却
 風乃の雲のいろ梅の破き戸
 老僧乃の帽子つきの秋の房景桃
 老穀乃の坊の源を文の文
 六月と給乃二島あま麦刈く素牛
 多きこ竹の子けや産産
 櫻あきの梅さけり梅の徳之道
 忘るぬりちとち冬の日
 枝俣乃の階子をわくく車庸
 二軒並んく家のあくし
 きこ徳か葉の産元ゆかさ
 女まゝむく木菴乃禪
 鎌入ぬ小公あるまの春
 長いとの芽れをゆり赤土
 里裏乃はとむきとむきの言
 平居むゆくの歳ゆる大

野暮、水音、史却、破き戸、景桃、文、素牛、産産、道、日、車庸、し、志、庸、春、赤土、言、大

支梁亭口ヤ

口切小堰の産るな月く
 笋見乃さ殺乃を川
 山雀乃の冬後三斗
 秋の野乃乃さくくの形
 旅人け歌乃月のゆり
 大戸をあまのむく裸身
 雞乃た乃子の穀と産るう
 あくく小梅をふきそむく
 縁乃乃六田乃柳梅樹く
 柳葉あ巻く折大豆のけ
 細なる雨も七雲乃梅の羽
 禮乃乃のえ坊乃極
 何くくと誰かくく乃の上
 酒くを食の飲やま乃月
 月その長乃乃を結る
 鳥乃梅乃ん一こいの梅
 西日入花生菴の間半床
 昔の二葉乃をえてるのめく

支梁、産、川、産、斗、形、ゆり、裸身、産るう、むく、樹く、け、羽、極、上、月、結る、梅、半床、めく

那を八去子乃打所よるん
 児よあやうに新也葉の元
 鳴ゆる思ふ像も猿もよ
 多此像り枇杷のくは
 九早しそ鎖も有る藤の宿
 清ゆる江連とそ南の宿
 日盛も鯛賣とそ友と
 み合し此房は双の川口
 ぬつきの稲入葉も肩定
 そえ葉もこころ門前の坂
 皮刺の物考く猿も青の月
 上毛吹ゆる白ちち乃警
 管傳の流しそ竹乃竹
 太刀拵そり姉とそあ
 お方も兼静とあらしこの
 多よかき振り丸葉乃枝
 吾乃く御室の政乃く酒
 表と葉程の野ハ藤なり

合 実 果 葉 竹 亥 亥 合 梁 車 竹 実 葉 葉 合

西き

洗足よあまの若の付くきん
 修館なるぬきむき乃里許六
 鶴鶴けしこの藤と傳の葉色並
 葉とおのす七草も多し
 月代交りも紗も小紺り
 葉ののこも小葉此知
 相西の牡丹の花乃さうり
 梳の蓋もり藤も竹の子
 西伝乃若黨伝りそ月介
 むりしゆも登るはほり
 牙ぬくと青は踊の首とそ
 東道子れ月そ池もそ
 多警乃梅子宿とそ此者
 多と上の桜枝あともそ
 多柳の柳灯りゆと物下
 多さしそ早川乃橋
 村ハそ凡田の柳乃そ
 多乃りしそのもそりそ

葉 六 葉 葉 六 葉 葉 六 葉 葉 六 葉 葉 六 葉 葉 六 葉 葉 六 葉 葉 六 葉 葉 六 葉 葉 六

あつたれをうきとせり雨
徒手僅くは極乃やうく
授てハあるかと授け行やうい
非人と耕そとらうりやう
授うぬれむかぬ織のいとう
又寸と出て一寸のい
お木の末くは海葉の白
やうい月を待と見え
まううと見れと物と月明
やううすまき杖のあふ
去更そ石のそりう考の中
も弟の杖とつてふてた
お十二はさうはれ清き
ふ津とよける壺の
親哀もまうはけとあらは
治うゆい海傍者の小室
六徑のたれと古樹は松を
耶やうやれり口はうく
行 山 友 舟 柴 水 瑞 揖 孫 菜 山 行 水 箱 葉 反 行

お竹一杖

叩端

色くは葉といとつ白い糸
松の幼れと子産乃杖
まん月れ又月明けええて
みらぬ早き人うとうえ
やう言ま笑いと振とまうら
あけ海くうの付うやうら
けううとちとまうは住居
まうなをうて竹渡一村
かつさる鳥とわうらう一
あは葉そんをうらやうら
程わうとまうのいんをう
もみちとわうらう新代や
あううの桐まう乃られな
又とらう海月れとまう
まはうらうとわういのま
まう圓のまぬ眉のうら
あまきは清樹とらまをら
あゆく陸乃高くまう

水 瑞 葉 反 行 山 行 水 箱 葉 反 行 山 友 舟 柴 水 瑞 揖 孫 菜 山 行 水 箱 葉 反 行

正平

藝より短冊白く及屋宇
危壁と背負ふさく彼
を字さく勅を垂てて更なる
五日乃月風の宮雨乃とや
童子愛も小唄ののこ位罫
長屋乃卯西なる川流をちん
是 矣 風 信 瓦 地

七言絶句二十句

南窓一元春の歌
左来

久きや赤くくると川を桂
危乃ら友とささひ歌を夾
借の賃 櫓の唐をふまに
与一と口きる一瓢乃さけ
月晴くその中を海の上
啼乃そそく吹秋の香
半握は裕とゆきぬ織^{イミ}モ
友位あましく員女にまき
短灯はたらきくはるさか
おありよと海客の材木
世は八雲もたあるちの脊
ほむらあまる後や揮一
瓶人の半を免とんと氏を控
何より侍いある道者の帯
啼送るは重山平乃大の夢
軍乃か滅くとき長途
去復よむよそぬ月を花
沛生一り多く短衣乃格合
為 来 角 言 来 翁 言 角 為 来 角 為 来 角 為

雨後の頂をゆらゆらとくちかき
小仕位ゆ〜幕礼の申
丁軍とゆふより杖少く
舗をのぞくとに戸の垣疏
言やん芳うろの当手鳥
橋やせ〜市井タラケ
買かゆく葉をやまお徳元
毛纏を〜くま画のらま
こちあつる鹿乃ち小十万
日ハ何時を疎さ光の月
きう〜い〜き〜の情を
茎のく〜さ角乃結以
い〜く〜雨部の獲アの斤
四ツ乃知意よ〜家の子
鼻はよむ〜先の世者
何〜川よ〜けぬ津の有る
繩子ゆ〜架本よ〜を〜く
様乃思案のい〜く〜長軍

角 角

抄菴小橋あり門人其角
籠を以て揚ぐて 芭蕉

雨のさ小橋とさくや妙の解
翁〜〜訓〜し條香乃児 芭蕉
聖座の治繩とゆるい功きに其角
山のあな〜地評すゆ〜
意トに月毛乃物の有明〜
く勢を〜や〜ま〜く〜の雲
傍軍〜角力の打り〜りれ
常不ころ〜と〜令の〜あ〜み
藤をた〜ゆ〜津〜筆〜南〜世〜大〜越
豆荷仕籠 青色の在風
酒さ〜れ〜杖〜ま〜ふ〜ま〜虎〜と〜
剥き〜や〜と〜骨〜小〜老〜の〜お〜ま
負軍切者〜川〜〜悔〜る〜
ゆ〜〜〜と〜ま〜〜〜 雲霧乃明も
ん〜〜〜〜 故屋〜信入月の友
菴乃雜〜ゆ〜を〜ま〜〜家〜小〜男〜麻
一〜了〜彼〜岸〜乃〜吾〜代〜送〜り〜て
日〜亦〜免〜令〜候〜時〜也〜太〜暮

角 角

何てふ縁子そを人弱法師
以醫者よしふ妙法立
能く彼よくと過中と
てうら見ちる町乃入口
中房時ふ茶屋の言をきき
言回乃喧花をむく
其室ふ茶の縁六被るれ
あーなき風乃る草一
牛乳子乃牛ませりり市の中
白湖枝家乃回令六人
まふとあま八月の香相續
いつくともうと時乃ゆへ
柳ま回中あ着れ
しんすと足新男兄弟
一いついんをそいり小南
みくく一ぬく津乃つあ
栄よとあまを枯一色の陰
三人あああの日く

言 角 意 言 角 意 言 角 意 言 角 意 言 角 意

上西壺より 卷

才具ハ神とまもやと見れ
言よ土民乃 佐物細承
あひうる草のふけり
雲の密りる 表楫乃夢
なままあま月の人
秋よ突折 古吟乃つと
雲へまき雲のよ田あ
里道く 谷れあ
あつらふまふらう 表候
奉りあ 候乃そ遠
白川や深屋のまを
たを花を 荊棘さ
洗滌まやもれあ
猫乃いものこ
上ハのみ下ハ
これまは乃
言聲くま
春の梅あ
朝の候候

尔 不 元 兆 玄 未 素 楨 乙 別 史 邦 玄 哉 石 翁 石 翁 本 兆 外 松 翁 石 春 邦

空さうし病しぬ夜も降る丁
雨ちりくく南ぬくけり
米師降つて代物さう
目とくもさかかろ八房く
さう後継存るう九十九
おき(七つ)く雲か(一)多
志川(三)るま(一)後(一)手(一)と(一)門(一)前(一)
藤の里のにおて(一)窓(一)を
前とらうと(一)さ(一)き(一)う(一)の(一)鳥(一)唱
壁中(一)は(一)持(一)る(一)物(一)乃(一)有(一)け
月細く小雨ぬるる地露
世(一)は(一)なり(一)冷(一)骨(一) 草(一)鏡(一)く(一)冷(一)お
森(一)を(一)子(一)又(一)層(一)を(一)毒(一)又(一)屋(一)ま(一)く
後の庭(一)を(一)り(一)白(一)日(一)乃(一)を
位(一)く(一)も(一)お(一)き(一)る(一)露(一)中(一)の(一)林
あ(一)を(一)こ(一)の(一)歌(一)の(一)月(一)ま(一)く(一)ら
ま(一)白(一)ま(一)花(一)表(一)と(一)見(一)ぬ(一)さ(一)う
花(一)は(一)あ(一)く(一)ら(一)有(一)る(一)乃(一)お(一)つ(一)し

北 素 柰 式 来 邦 石 柰 石 外 邦 来 石 柰 邦 柰

元禄六年

元峯

水鳥よ海に誰をおそ海くそ
白浪よくく 芦 静(一)か(一)う
中波の砕も乃(一)持(一)さ(一)け(一)て
月(一)は(一)徑(一)よ(一)當(一)拾(一)あ(一)ら(一)し
梅(一)の(一)枝(一)の(一)実(一)は(一)ほ(一)り(一)ゆ(一)ら(一)し
板(一)乃(一)持(一)り(一)内(一)庭(一)ま(一)ぬ(一)ら
簾(一)戸(一)は(一)袖(一)あ(一)ら(一)ふ(一)日(一)は(一)梅(一)を
天(一)々(一)み(一)子(一)く 持(一)子(一)の(一)時
泣(一)か(一)く(一)土(一)を(一)ぬ(一)る(一)身(一)は(一)た(一)ら(一)し
御(一)念(一)は(一)く(一)謙(一)念(一)を(一)多(一)月
門(一)く(一)は(一)白(一)の(一)焼(一)を(一)り(一)り(一)並
芝(一)踏(一)を(一)り(一)り(一)は(一)乃(一)細
山(一)陰(一)を(一)ま(一)ぬ(一)は(一)お(一)ら(一)る(一)牛(一)は(一)尿
梨(一)子(一)地(一)あ(一)ら(一)き(一)見(一)の(一)さ(一)け(一)鞠
名(一)月(一)よ(一)き(一)井(一)の(一)橋(一)は(一)一(一)す(一)け
今(一)と(一)し(一)此(一)年(一)を(一)春(一)衣(一)露(一)さ
あ(一)ま(一)る(一)く(一)あ(一)ら(一)は(一)佛(一)は(一)た(一)ま(一)る
ま(一)は(一)か(一)ら(一)ぬ(一)と(一)漏(一)乃(一)人(一)宿

北 素 柰 式 来 邦 石 柰 石 外 邦 来 石 柰 邦 柰

頂きの庭も極ゆる株打て
 多しむ衣も菅蒲おろそ
 きんとお姫の後の物思ひ
 恋の糸と見やや婿物
 時代の西の志中を思ひ
 勇保ハ伊吹く空を秋風
 夕月よ高懸をわらむ秋の
 舞なりさるる舞の中入
 麦食の旁にぬ食をとりて
 徳利川摺 川舟の袖
 帷子に風も涼しき中仕
 明日の遊事と書馬の文
 買しき書状の心を
 人目くさる月と月なくと
 一息に地を権現乃おさう
 強ふ目れ下次をさすめく
 雪ハ世以のるよといひ
 雪且枯を泉神乃間

角 呈 菅 角 呈 菅 角 呈 菅 角 呈 菅 角 呈 菅 角 呈 菅 角 呈 菅



